存在の表と裏
The Face and the Other Side of Being

川津　茂生 KAWAZU, Shigeo
● 国際武道大学
International Budo University

Keywords 存在科学，存在，西田哲学，科学
Ontological science, being, Nishida philosophy, science

ABSTRACT

存在の問題について考える上で，存在には表と裏があると考えるのがよいであろう．存在の表面の学は人文科学的研究であり，存在の裏面の学は自然科学的研究である．表面からは裏面は見えず，裏面から表面は見えない．この対立する二つの学を安易に統合することなく，方法論的二元論によってプラグマティックに繋ぎ，二つの学の「学際的研究」をすることが求められる。そのような考え方を樹立するためには，西田哲学の主客未分の「場所」における主客の分節という考え方を応用し，表面の学における「場所」の直接性と裏面の学における主客分離の間接性の間を変換する空間を基礎とすべきであろう．存在科学はそのような学際的研究の上に基礎づけられるべきであろう．

In thinking about the problem of being, it would be good to recognize the idea that there are two sides to it; the face and the other side to being. The study of the face of being can be considered to be the humanistic approach to being and that of the other side of being the natural scientific approach to being. It must be emphasized that the other side of being cannot be seen from the face and the face cannot be seen from the other side. The two approaches to being should not be unified directly. Instead, the "interdisciplinary" connection of the two studies should be made possible pragmatically through the "methodological dualism." To establish such a connection we need to create a space where the immediacy of "basho (or topos)" in the study of the face of being can be transformed to the indirectness of the subject - object separability in the study of the other side of being, by means of the analogical application of Nishida philosophy. Ontological science should be based on such an "interdisciplinary" study.

わたしたち人間は，存在とは何かという問いを問わずには生きていけない存在者である．だれでも孤独な夜に自分の人生の行く末に想いを巡らし，いつかはやってくる人生の終りを見つめるとき，戦きとともに，自分の存在とはいったい何なのだろう，と考えてしまうものである．その存在への問いは古の人ももったし，現代のわれわれも同じように持つものであろう．しかし，同じ存在の問いが現代人にとってはより熾烈なものとして差し迫ってくる．というのも，近代自然科学の産み出した世界像が，われわれの生きた自然な生活の背後に無機質の音もなく色もない死んだ世界を描き出し，その世界像の方が本当の現実なのだ，と強い説得力をもって迫ってくるからである．そのような無機質の世界がわれわれの周りに空間的にも時間的にも果てしなく拡がっているのだとしたら，そしてわれわれ自身さえ実はそのような無機質な世界の一部に過ぎないのだとしたら，われわれの存在の意味はいったいどこに見出したらよいのだろう．現代人はこの無機質の世界観に迫られ，古の人の持たなかった恐怖とともに，存在の問いを鋭く問いつめていくのである．

そのような時代にあって，哲学者は近代的な自然科学的世界像と果敢に闘ってきた．そして，存在とはそもそもその真の姿を自然科学的な方法によって描き出すことはできず，むしろ，人生を人間らしく生き，決断し，与えられた苦悩を引き受けつつ豊かな意味の世界を見出すときに，その真の姿が垣間見えてくるものだと考えるようになったのである．哲学者のこのような存在の見方は，まことに真実を見つめた誠実な思索によって勝ち取られた人間性の勝利といえよう．

しかし，世界の中に人間らしさを回復しようとする一方で，哲学者は近代自然科学が築き上げた入念な世界像を根源的なものではなく，自然科学に特有な方法によって描かれた世界の一つの像に過ぎないと考えるようになった．そのような考え方は人生をいきいきと生き，存在の真の意味を見出すために必要な考え方のようにも思える．しかし，果たしてそれでよいのだろうか．自然科学的な研究の進歩は止まるところを知らず，われわれを取り囲む宇宙の仕組みからわれわれ自身の意識の成立基盤までありとあらゆるものをその対象とし，世界を形成している一般法則を暴き出そうとしている．その進歩は，たしかに進歩といいつつも多くの負の現実をもたらす結果になってしまったことはよく知られている．しかし，わたしたちの現実の生活が科学技術の進歩によって隅々まで浸透され豊かに支えられていることも，また，一方で事実なのである．そして，わたしたち自身が自然科学的研究に一歩足を踏み入れるならば，そこには広々とした解明されるときを待つ真理の沃野が待ち受けているのである．そのような自然科学の領野を非根源的なものと断言するのは容易なことであろうか．哲学者たちがいうように，本当の真理は自然科学的な真理を相対化した上で始めて見出せる，いきいきした生活の直下の，あるいはその内部から見た，持続の中にしかないものなのであろうか．

このような哲学と科学の相克に面して，わたしは，存在をテーマとして哲学から受け取りながらそれを科学的に研究するという「存在科学」の立場から，存在の哲学と科学を二つの極とし，その周囲を循環しながら問題の解決を計るという方法を提案した（川津，2005）．その際わたしは，科学の手前に立つ哲学という考え方に対して，哲学の手前に立つ科学という考え方もあり得ることを柔軟に認めて，科学と哲学が対話することを提案したのであった．

しかし，わたしはここでそのような考え方からさらに一歩進めて，存在には表と裏があり，存在は表から見ることも裏から見ることもできるのだと考えてみたい．ここで，表とは，西田幾多郎（1991）が「色もあり音もあるありのままの世界」を「昼の見方」と表現したのに対応し，裏とは彼が「色もなく音もない自然科学的な世界」を「夜の見方」と表現したのに対応している．西田は昼の見方に立脚し，存在の真理を探究したのであった．（西田は存在の根底をむ

しろ「無」と考えているが，ここではそれをも含めて広い意味で存在ということばを使う.）表と裏という表現を使えば，西田に限らず現代の哲学者は一般に，存在を表から見ようとし，存在を裏から見ることを非根源的な見方だとして批判する．それはハイデガーにもいえることである（渡辺，1962）．しかしわたしは，表裏は一体であると考えたい．表は裏なくしてはありえず，裏も表なくしてはありえない．いきいきとした生活を生きているとき，わたしたちは存在を表から見ている．ところがいったん自然科学者の立場に立てばわたしたちは存在を裏から見ることになる．しかし，大事なことは，表は表からしか見えず，裏は裏からしか見えないということなのだ．しばしば哲学者は表の立場から裏の世界を相対化しつつ，表の立場に立ち続けようとする．それは，裏は表からは見えないのに強引に表の視野を裏にまで押し広げようとしているかのようだ．しばしば自然科学者は表の世界を裏の視野から見えるといいはる．それは，表は裏からは見えないのに強引に裏の視野を表にまで押し広げようとしているかのようだ．表は表，裏は裏と認めないところに両者の問題があるのではないか．かつて存在は表からしか見られない時代があった．自然科学の出現によって存在は裏からも見えるようになった．そして，表の見方と裏の見方の闘争が始まったのである．

存在を表と裏に分けるのは二元論であろうか．表裏は一体なのだから二元論ではないともいえるが，そのようにいっただけでは，ことばの綾で二元論を解消したかのように見せているだけだ，と批判されてしまう可能性もある．そこでわたしは，表と裏に分けるのは二元論であることを認めよう．そればかりでなく，表と裏の等根源性も認めようと思う．ただしかし，これは方法論的二元論あるいは方法論的等根源性なのであり，この立場が表の立場や裏の立場に勝る第三の立場としてもっとも根源的な立場であるというわけではない．わたしたちはもちろん表も裏も見ることができる．だから，つい表面に立ったままで無理に裏面を見ようとしたり，裏面に立ったままで無理に表面を見ようとしたりしてしまうが，それはできない相談だ．表面は表面からしか見えず，裏面は裏面からしか見えないのだから，わたしたちにできるのは，表面と裏面の間の往復運動だけである．表面と裏面の往復運動とは，表面の学と裏面の学との間の学際的研究のことだといってもいい．表面と裏面の間には厚い壁がある．しかし，そのような学際的方法によって表面と裏面を隔てている壁はしだいに薄くなって，いずれは膜のようになるであろう．そして，そのような営みの無限遠の収束点でのみその膜は透明になるであろう．

それでは，表面の学と裏面の学との学際的研究とするといった場合，表面の学と裏面の学の方法の相違とはそもそもどのようなものであろう．

おそらく，表面の学のもっとも現代的な見方は，いま仮にそれを西田哲学に範をとるとすれば，それは，主客の対立の手前に遡り，私が対象を見る，という図式を批判して，未だ主もなく客もない，ものを言葉で表現する以前の経験の原野にまで遡源する，主客未分，主客合一の立場というものであろう（1）．それに対して，裏面の学の見方は，主観と客観の対立を前提とし，私が対象を見る，という図式を原理とする，近代的な主客分離の立場であろう．表面の学に関して，われわれは，主客未分の経験の世界というものが確かにあるということを認めねばなるまい．「色を見，音を聞く刹那，未だ主もなく客もない」とか，「我花を見る．此時，花は我，我は花」といった主客未分の世界は確かにある（2）．われわれ日本人にとってはそのような直接的な経験の世界はそれほど理解するのに難しいものではないであろう．しかし，主客未分の経験の世界というものが主観と客観が対立した主客分離の構造より，より根源的なものなのだと言い切ってしまえば，議論の余地はなくなる．裏面の学はそれがよって立つ立脚点を失うであろう．裏面の学，すなわち科学が成立するためには，わたしが対象と向かい合う，間接的な主客分離の経験の世界もまた確かにある，ということを認めねばならない．このとき注意を払うべきことは，あくまで表面

の学に立脚し，主客未分の経験の世界をもっとも根源的としながら，その経験の自発自展の分化したかたちとして主客の分節を説明する立場に対して，わたしたちがどのような態度を採るかということであろう．そのような立場に対して，おそらく，わたしたちは，わたしたちが主客未分の直接性から出発することは認めるべきかもしれない．しかし，だからといってそのような直接性だけが根源的だと断言してしまわず，直接性の根源性からやはり同じく根源的な主客分離の間接性へと飛躍するその飛躍の中にもまた人間的な真実があることを認めるべきではないであろうか．その際，直接性を大きな枠組みとしつつ，あくまで直接性の枠内で主客の分節を考えるという立場に与せず，直接性を越えた本来の意味での間接性の立場を評価するべきではないであろうか．というのも，もしいま，直接性と間接性のどちらがより根源的かという議論の一方にあまりに性急に偏ってしまえば，われわれは人文科学と自然科学の乖離を埋めるための話し合いの余地を失うように思われるからである．そのように考えると，直接性の世界と間接性の世界の等根源性を認めて，両者の間を往復する学際的交流に解決の道を求めることが，方法論的に採るべき道であるように思われる．そして，それはまた，一つのプラグマティックな道といってもいいかもしれない．

このことはまた，Weber（1936）のいう学問の自己抑制ということとも関連している．Weberによれば学問は自己抑制するべきであり，その領野を越えて発言するべきではない．その考え方を応用すれば，それぞれの学はその学の領野の内部で自己抑制するべきであるともいえよう．それは，表面の学も裏面の学もそれぞれ自身の領野で自己抑制するべきだ，ということを示唆しはしないだろうか．表面の学が自己抑制せず，表裏を隔てている膜を破って中央突破し，裏面にまで表面の学を押し広げてしまえば，そのとき，われわれは，存在の充実という名目のために，近代的合理性に裏打ちされた裏面の学の科学的な世界観を蹂躙する魔術を解放してしまうという危険を冒すことになるであろう．しかしまた，その反対に，裏面の学が自己抑制せずに，表裏を隔てている膜を破って中央突破し，表面にまで裏面の学を押し広げてしまえば，そのとき，われわれは，科学の旗印の下に，いきいきした存在の現場の躍動に盲目になってしまうという危険を冒すことになるであろう．表と裏はおそらく彼岸においてしか透明にならないのだ．彼岸でしか一元論にならないものを強引に此岸で一元論にしようとすることは抑制しなくてはならない．表面の学はそれとして自己抑制し，裏面の学もそれとして自己抑制しなくてはならないのである．そして，表面と裏面はその中央を突き破って放縦に行き来するのではなく，表裏とは別のメタレベルの空間を通って往復すべきなのである．それは、いきいきした生を無化することもなく自然科学的世界に魔術を持ち込むこともなく，両者の間を往復することに耐えねばならない，ということを意味している．わたしたちは，そのような方法論的二元論に耐えねばならない．

同じことを繰り返すようだが，ここでもう一度はじめの問題に立ち返りつつ，なぜわたしが存在の表面の学と裏面の学の独立と等根源性を主張し，両者をメタレベルの空間で結ぶ方法論的二元論を提唱するのか述べておこう．そもそもその理由は，表面の学と裏面の学すなわち存在に対する人文科学的アプローチと自然科学的アプローチの決定的な乖離という現実の問題に取り組むにあたり安易に一方の立場に立つことができない，という認識の中にある．もちろん学の世界においては一方の立場に立ってすべてを見渡そうとする傾向の方が実際には強いであろう．たとえば、西田哲学は存在の根底である「無」も自然科学も一つの哲学的立場から見ようとしている．またそれとは反対の方向から現代の脳科学や認知科学は自然科学の立場ですべてを見ようとしている．しかし，それぞれの立場はすべてを包み込もうとしつつも立場としては対極にあるのである．もちろん一つの立場が対立する立場を大きく飲み込んでしまう可能性や，

対立する二つの立場がお互いを包みあい一つの立場に融合してしまうという可能性もなくはない．いずれにしても，そのような可能性とは一つの立場にすべてが収斂していく可能性である．そのような可能性を夢見ることは必ずしも間違ったことではない．また、もしそのような可能性が実現可能であるなら，それはたいへん喜ばしいことであるかもしれない．しかし，現実はどうであろうか．対立する立場の研究者がすべてを説明する統一的なパースペクティヴの実現を希求しつつも，実はお互いの立場の間の驚くべき深淵と乖離に無頓着なだけではなかろうか．そのような現実を踏まえたとき，わたしは一つの立場にすべてが収斂するという希望は終末論的な希望として持つ以外に持ちようがないと考えるのである．それゆえにわたしは，方法論的二元論つまりプラグマティックな道を選ぼうと主張するのである．それはすべての真理を一つの立場から見たいという，容易に陥りやすい夢を断念することを意味している．（この意味で西田幾多郎も一人の夢見る哲学者だったのではないか.）

それでは議論を先に進めて，表裏を往復するときに通り抜けるメタレベルの空間とは何なのか考えてみよう．その空間にこそ表面の学と裏面の学の間の学際的研究を導く鍵があるのではないだろうか．表面の学の立場は主客未分の立場であり，裏面の学の立場は主客分離の立場であった．一方で主客未分の世界を見る視点，他方で主客分離の世界を見る視点，それらの視点の間を変換する空間とはどのようなものであろうか．それはまったく異質な結びつけようのない二つのものの見方を結びつける空間である．そのような空間は，対立するもの，矛盾するものを結びつけようと試みた，その意味で，表面の立場にたって裏面まで説明し尽くそうと試みた，西田哲学を換骨奪胎することによって見通せるのではないだろうか．西田によれば，表面の視点とはどこまでも対象化できない「場所」の立場であろう．それに対して，裏面の視点とは，いわば，ものをあくまで対象化する超越論的主観性としての視「点」の立場であろう．表面を映すものはどこまでも対象化できない「場所」であり，裏面をあくまで対象化するものは主観としての視「点」である．そして，西田哲学ではあくまで対象化ということを拒みつつも，主もなく客もない「一」から主客へ分節した「二」へ，またその反対に，「二」から「一」への運動というものが考えられるのだが，それはどこまでも対象化できない「場所」の立場から考えられている．そこには存在あるいはその根底としての「無」があくまで対象化できないということを基本に据えた考え方があり，その立場の上での主客の分節でしかない．しかし，上にものべたように，そのような考え方は表面にたったまま裏面をみようとする一つの夢のようなものであろう．ただ西田の「場所」の考え方は捨てがたい魅力をもっている．そこで「場所」の上での「一」と「二」の間の運動という考え方を換骨奪胎して応用し，表面を映す「場所」と裏面を対象化する視「点」というまったく異質なものの見方の間の運動と改釈することはできないであろうか．もちろん，たとえば上田（1994）の考え方にしたがえば，西田哲学をそのように換骨奪胎することはおよそ不可能なことであろう．それが不可能だから西田はあくまで場所の立場に立つのである．しかし，あくまで場所の立場に立つということは，繰り返しになるが，あくまで表面の学の立場から裏面まで説明し尽くそうとする強引な思考を押し通すことなのである．近代というものの限界を見るものは，西田哲学に深い理解を示す（藤田，1998）．たしかに近代合理主義は批判されねばなるまい．しかし，近代の批判の立場に立ち尽くすことで，問題の真の解決は得られるだろうか．近代の継承ということも，また，必要ではなかろうか．いま少し観点をずらせば，上田（1994）は，西田哲学を西洋と東洋を包む世界を問題にした哲学だとしている．しかし，それは，その問題を東洋の立場から見たものであった．そこに「場所」の立場があり，それは画期的な考えであったといえよう．しかし，われわれに必要なのは，

西洋が東洋を覆うのでもなく東洋が西洋を包むのでもない，東洋と西洋の対称性ではないだろうか．それと同じように，近代をどう捉えるかという問題においても，近代を中心とするのでもなく，近代批判を中心とするのでもなく，近代と近代批判の間に対称性を保つことこそが必要なのではないだろうか．近代合理主義の万能感に浸ってはいけないが，近代合理主義に対する拒否感の感情に流されてもいけないのである．そのような対称性を保つこと，そのようなバランス感覚を保つことが，すでに述べた表面の学と裏面の学の自己抑制を求めることと繋がっているのである．

そのような観点からわたしは，表面の学としての西田の思考を換骨奪胎しながらもそれと類比的に，表面を映す「場所」と裏面を対象化する視「点」の立場を変換する方法論的空間という考え方を導入しようと思う．それは一つの困難ではあるけれども選びとらざるをえない方法論的な道であり，また，一つの立場からすべてを説明したいという願望を断念した道である．そして，その空間というのは表面の学と裏面の学，すなわち人文科学と自然科学の対立と乖離を克服しようとする努力のための方法論的空間であり，その意味でプラグマティックな空間なのである．表面があり裏面があり，また，両者を行き来するための方法論的な空間がある．そして，表面と方法論的空間の間は，上に述べたように，一種の飛躍を含む類比的な考え方によって移動する．おそらく，つぎに問題となるのは，その方法論的空間と裏面の間の移動をどのようにするべきか，ということであろう．おそらく，一番目の移動が類比的であったように，つぎの移動も類比的な考え方によって行うべきではないだろうか，表面と裏面の間は類比の自乗によって行き来するべきではないだろうか．

そのように考えてみると，ここまで方法論的に考えてきたことが，いまや，すでに述べた表面の学と裏面の学の学際的研究の内容にまで係わってくる事態が出現するかのように思える．すなわち，方法論的空間の持つ，映す「場所」と対象化する視「点」の変換という構図と裏面の学としての認知科学や認知心理学の構図の間に類比的なものが出現してくるように見えるからである．というのも，裏面の学としての認知科学や認知心理学で，すでに，シンボリックな表象（「点」的なもの）と分散した表象（「場所」的なもの）との対立として表面化している問題や，実体的な心（「点」的なもの）と環境に拡散した心（「場所」的なもの）という考え方の対立として表面化している問題が，まさに映す「場所」と対象化する視「点」の関係の構図と自ずと類比的に関連してくるからである．そこにおいて，表面の学の構図と方法論的空間の構図と裏面の学の構図の三者の間に，明らかに構図の類比が出現して来ているように見える．そういった類比を媒介にした探究こそが存在の科学へと結びつくといえよう．その際，存在の科学は科学として自己抑制し，短絡的に哲学的な視点と直結してはいけない．というのも認知科学や認知心理学で表象や心の概念が問題になるとき，それはどこまでも対象化された表象でありまた心なのであり，その意味でどこまでも対象化されない「無の場所」の議論と短絡的に結びつけてはいけないからである．存在科学の構図は，類比の自乗によって，方法論的に，プラグマティックに存在の哲学の構図と間接的に関連づけられるのみである．そのことが，わたしが別の論考（川津，2005）で，存在科学を成立させるためには哲学と科学がそれぞれの存在論を括弧に入れて判断を中断した上で関連づけられるべきである，といったことをより具体的な形で実現することにもなるであろう．

わたしはこの論考で存在の人文科学と自然科学の乖離を埋めることを目指すための心構えについての試論を述べた．表面の学としての人文科学と裏面の学としての自然科学は安易に統一できると考えてはならない．わたしは、そのことを西田哲学に学びつつ，またそれを批判しつつ述べてみた．矛盾しているものを統一することはすべて人の持つ願望かもしれない．しかし，矛盾を同一化してしまわず，現世ではプラグマ

ティックに矛盾に取り組み，矛盾の最終的解決につては，それを終末論的に待とうではないか．この矛盾に対するプラグマティックな取り組みという姿勢が，わたしが別の論考（川津，2005）で，存在の科学を「発見的方法」として捉えよう，と述べたことと結びつき，また，終末論的に解決を待つという姿勢が，同じ論考でわたしが，「矛盾の解決をゆっくり俟とうではないか」と述べたことと繋がるのである．

注

（注１）本論考において西田哲学に論及するにあたり，藤田(1998, 2004)，小坂(1991, 2004)，中村(1983, 1989, 2001)，西田(1991, 1998)，上田(1994)を参照した．

（注２）ここにおける２つの引用は，上田(1994)による西田幾多郎の引用による．

〈参考文献〉

藤田正勝(1998)現代思想としての西田幾多郎　講談社選書メチエ

藤田正勝(2004)西田哲学の場所　西田哲学会年報，創刊号，53-59.

川津茂生(2005)存在科学へ向けて 教育研究,47,43-47.

小坂国継(1991)西田哲学の研究－場所の論理の生成と構造－　ミネルバ書房

小坂国継(2004)場所の論理と行為的直観　西田哲学会年報　創刊号, 29-40.

中村雄二郎(1983)西田幾多郎　岩波書店

中村雄二郎(1989)場所（トポス）　弘文堂

中村雄二郎(2001)西田幾多郎Ⅱ　岩波現代文庫

西田幾多郎(1991)善の研究 ワイド版岩波文庫

西田幾多郎(1998)西田哲学選集第一巻　西田幾多郎による西田哲学入門　大橋良介（編）　燈影舎

上田閑照(1994)経験と自覚－西田哲学の「場所」を求めて－　岩波書店

渡辺二郎(1962)ハイデッガーの実存思想　勁草書房

Weber，M.(1936)　職業としての学問　尾高邦雄（訳）岩波文庫